

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ25】

J R 東日本労政の問題点回顧

J R 東日本住田正二初代社長の認識に疑義あり！

J R 東日本最高顧問・住田正二著『官の経営 民の経営』（毎日新聞社）に、次の記述がある。

【一部の評論家や J R 東日本に好意を待たない人々の中には、J R 東日本の労使関係は安定しているように見えるが、実情は反対で経営サイドが主力組合である J R 東労組に抑え込まれ、人事権も組合の意のままになっていると主張する。全く根も葉もない話であるが、執拗にこのような風説をまいて、J R 東日本の労使関係を混乱させ、J R 東日本の経営がつかずくことを狙っているように思える。 - 中略 -。 J R 東日本の歴代トップはこの点きっちりやってきているし、また組合側から人事について注文をつけられたことは一度もなかったと断言できる】

筆者は、官僚の最高峰（運輸事務次官）も極め、J R 東日本初代社長に就任した住田正二氏が、これを今日においても正しい記述と思っているとしたら、同氏の経営者としてのセンスを疑う。松崎氏の言ではないが、「質」に問題あり、「任」に非ずである。

小著、正・続『もう一つの未完の「国鉄改革」』を読んで貰うのが一番早道だが、そもいまいので、ここで若干の事例を示すことにする。

インターネットですぐ読むことができるのだが、反松崎・本部派の『猛獣王国』のホームページ「偽善者達の蛮行 横浜編」の04年11月12日更新の部分から次の記述を抽出することが出来る。

（「東京問題」は、）「東京地本 - 支社間の窓口閉鎖」「伊藤総務部長更迭要求」などへとエスカレートしていった。とどめは（会社は）「俺を無視しやがって」と私憤を爆発させた松崎顧問の2002年7月9日の第18回定期大会「特別講演」（松崎氏はこの大会で顧問職を辞任）や翌日の「遵法闘争」発言となり、それをめぐっての疑問や意見を松崎前顧問の取り巻きが組織問題化するに至った。

2002年7月14日、組織破壊者の「優遇人事」をめぐる一連の問題に対して「トップ会談」と呼ばれる「松崎 - 大塚会談」が行われた。この席で大塚社長が「松崎さんの言うとおりです」と謝罪したと松崎前顧問は様々な場で言っている。東京地本は機関誌「コンパス」でこの松崎発言を何の躊躇もなく公表した。側近者達は「会社は前顧問に完全屈服した」と誇らしげに吹聴すらしたのである。

「トップ会談」によって「松崎明の存在」を誇示したかったということである。「J R 東労組は“松崎商店”なのだ」と自らが内外に声高々と宣言したということなのだ。まさに“私憤をはらした私物化集約”であった。

ついでにいえば、「前顧問が怒ってトップ会談が実現したから労使問題が解決した」と松崎親衛隊諸君らは声を大にしていうが、「トップ会談」というなら「角岸委員長 - 大塚社長」会談のことをそう言うのが世間の常識なのであって、間違っても「松崎前顧問 - 大塚社長」会談のことではないのだ。

右の記述は、住田氏のいう「主力組合である J R 東労組」の反本部派の元役員、その他の人々が作成した文章から抽出したものである。そして住田氏に言うておくと、「東京問題」とは、J R 東日本会社が行った“管理職者人事（支社課長）”に対して「松崎氏が激怒した」という理不尽なことに端を発した事件である。

住田氏が、「自分の時代は絶対にそんなことはなかった」「それは後の社長の話だろう」などと都合よく考えるかも知れないので先に言うておくと、「東京問題」被害者の A 課長などはまだ無名だが、J R 東日本革マル問題の過去をざっと顧みただけでも、東大卒キャリア U（故人）、同 N（自治体首長）、中央鉄道学園大学課程卒 S（大学教授）の各氏など、「松崎氏の逆鱗に触れ」て左遷の憂き目をみた J R 東日本革マル問題ウォッチャーの間では誰一人知らない者のない人々の名前がすぐ浮かんでくる。それらの“有名な”人々の左遷人事は、住田氏の社長時代のことだ。

< J R 東日本労政『二十年目の検証』180ページから182ページより抜粋 >

民主化の声・声・声・・・

2005.12. 6 その25

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (5)

～ JR総連傘下「九州労」大量脱退事件の真相～



* 鉄道連合に参加している南国鉄道労組の組合員は1300名を割っていた。南国鉄道労組の新藤委員長は日夜悩んでいた。「このままでは組織はジリ貧だ。なんとか打開する方法がないものか」 - 中略 - 組合員が減少する現状をどう打開するか。思い悩んでも妙案はなかった。ある日、思いあぐねて新藤委員長は大元に指導を求めた。

新藤委員長の悩みに、大元はいつものように間髪いれず明快に答えた。

「新藤にしては悩んだこと自体が上出来だ。統一なんか出来るわけがないだろう。会社組合へのもぐり込みだよ。それも一気呵成にやらなければならん。鉄道連合を敵視している日の丸労組の大会までだな」その席に出席していた極少数の連合幹部たちからは、意見も疑問も一切なかった。腹の中では困惑したものの議論の余地はなかった。

大元の発言は、組織では議論の出発点ではなく結論である。しかも単なる個人の意見ではなく、組織決定を意味している。多数派の会社組合に、少数派の南国鉄道労組の活動家が潜り込むという戦術は、ただちに一部幹部の手によって秘密裡にすすめられた。 - 中略 - 会社は警察と連絡をとりながら、会社組合の幹部を呼びつけ、南国鉄道労組に「あからさまな選別加入をせよ」という攻撃をかけさせた。結果として南国鉄道労組内部は、組織に残る組合員、会社組合に加入する組合員、理由がわからないまま幹部の引き回しに嫌気がさして南国鉄道労組から脱退する組合員に三分解した。南国鉄道労組の組織は半減し、影響力は急速に衰えた。(p . 35 ~ 36)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【鉄道連合傘下の「九州労」(K委員長)の組合員は1300名を割っていた。K委員長は、「このままでは組織はジリ貧だ。なんとか打開する方法はないものか」と、平成12年9月上旬、大元(M氏)に指導を求めた。大元は間髪いれず明快に答え、指導した。「会社組合へのもぐり込みだよ。それも一気呵成にやらなければならん。…」多数派の組合に、少数派の九州労の組合員を潜り込ませるといふ擬装脱退戦術は、ただちに一部幹部の手によって秘密裡に進められた。しかし、この大元(M氏)の「もぐり込み」戦術は、JR連合とJR九州会社側に看破られ、大失敗。その結果、九州労組織は半減してしまった】

平成12年10月に、いわゆる「九州騒動」と言われるJR総連系の組合・JR九州労からの大量脱退があったことは事実である。この「もぐり込み」戦術が、大元(M氏)の指導のもとに行われたのではと、当時、噂されていた。